

## まほうにかけられた耳

人混みの中 お母さんって呼ぶと

お母さんが ふり返る

いつもの 私のお母さん

でも不思議

たくさんの おばさんたちの目が

あつちからも こつちからも

この私を 見つめてる

どうしてかなあー

いつも 不思議でしかたなかった

幼き日の 記憶

今では お母さんになった私

ふとまちなかで お母さんって聞こえると

立ち止まって ふり返る

そこには 見知らぬ女の子

そりやそうね

うちの子が ここにいるはずないって

分かっているけど この耳が

お母さん でふり返る

そんな魔法に

かけられてるから 見渡すと

そこらじゅうに そんな耳した

お母さんたちが あふれてた

## 母のおてだま

小さな生地の切れ端を 縫い合わせ

母が お手玉を縫う

継ぎ合わせが 間違つて

辻褄が合わなくなる 迷子になる

お手玉も生き方も 似ている

出来上がる お手玉の明るさに

励まされ 母はお手玉を縫う

明るい色と 静かな色を縫い合わせ

母が お手玉を縫う

ひと針ひとはり 丁寧に縫う

縫い合わせる事で 形が出来る

可愛い お手玉になる

母の 寂しさの深さほど

お手玉の数が増える

## 電話

友達の携帯に掛かってきた電話

相手は母親のようだ

なんだか迷惑そうな友達

でも

どこか嬉しそうな友達

私と母

最後に話したのはいつだろう

夜 母の携帯鳴らしてみる

「もしもし、どうしたの?」

何かあったのかとすぐ心配してくる

「いや、特に何もないけど・・・」

何もないなんて本当は 嘘

「元気なん?」

「辛いことはないん?」

「笑顔でおるん?」

聞きたいことは山程あるんだ 本当は

母親なのに照れ臭い

母親だから照れ臭い

電話切った後 私は考える

親孝行って

何から始めたらいいんだろう

## 神隠しの町の母

「おかあさんはでぶです

すこしやさしいです

ときどき原町につれていつてくれます」

一時帰宅で母が持ち帰った荷物は

私が初めて書いた詩のノート

アルバム

手紙

何も入れずに入らずに

思い出さがすようなものばかり

もう原町には行けないんだねえ

何で認知症になったのかねえ

なんで原発爆発したのかねえ

母のひとりごと

渡されたゴミ袋一枚に

母の優先順位はくるつてる

貴重品も大切にしてた着物も

# お年玉

『辰夫よ、悪りいが金貸してエなア』

一昨年亡くなった母が

初夢に出てきた

粗相そそうしたときのようなはにかみで

『ちいとでええきになア』

『ばアやんは、もうアツチの世界じやきに、

金の工面くめんはいらんぞな、心配せんでもええ』

私には母の金使いの先は読めていた

生前、母は正月のしきたりにしていたのだ

『正月きたケンなア、茂美に正子や春代の孫  
たちにのう』

『わかった、わかった、あんしんせんかい。

ワシがみんなに言うとかくわい。ばアやんが遠

い処から来てくれたいうて渡しておくわ』

『ほんまに、だんだん・・・』

言うて、フツと消えた

(だんだん＝有難うの意)

## スーパー母さん

齢 九十の母が 手押し車を頼りに  
ゆつくり ゆつくり帰ってくる  
老人会 仲間の後を だれよりも遅く  
坂の途中にある 実家の表で  
ぼちぼち 帰る頃かな？と待っている  
すると 花の つぼみが ぽつと  
綻ぶふうに ほほえむ母が見える

いつも来てもらうて ええねチヨさんは  
ほうよ 独り暮らしも ええもんよ  
あつけらかんと笑う母 夫を戦地に送り  
以来、身につけた 母という強さなのか  
疎開先では 赤んぼうの私を 背負い  
びんご表を織ったそうな  
村一番の織り手じやった 仲買さんに  
そりゃあ もう 喜ばれたもんよと  
さても 若かりし頃を自慢する

ふる里は瀬戸内の 坂で名高い町である  
毬みたいに降りるけど 上りはきつい  
ほんとうは そんな坂を  
母さん あなたは いくつ上ったのかしら  
女手 ひとつで  
(ありがとう ごめんなさいね)

ちつと腰が痛いのがう そう いろいろ  
私の好きな 白和えを作ってくれる  
電磁調理器だつて 携帯電話だつて  
流行りものを使える スーパー母さんだ  
日々 確かな生命を感じながら  
今日も とつとつ 坂を歩む 母  
うちは百歳になつても歩くけえの、と  
ええ そうね きつとね  
私の笑顔と あふれる陽光を とりこんで  
母の一日は 過ぎてゆく  
瀬戸内の坂に 生まれたたの光が まぶしい

## 母と娘

特別に用事が有る訳じゃないけれど  
側にいたくなる

筑前煮の煮かた教えてとか

デパートの催事場に水羊羹があつたとか

そんな理由をつけて母の顔を見に行く

あつという間に帰りの時間になる

「また来るね」と私

「気をつけて帰るのよ」と母

門の前で手を振る母に

もう二度と会えない気がして涙が出る

曲がり角を曲がりもう一度引き返す

まだ母は立っていた

子どもの頃の夏休み

母の実家に里帰り

祖母の側にはいつも母がいた

かまどであられを炒る二人

洗濯物を畳む二人

ニワトリ小屋の掃除をする二人

母は祖母の娘に戻っていた

「また おいな」（また 来なさい）

腰の曲がったもんぺ姿で祖母は言う

お土産は炒ったあられとゆで卵

そつと涙を拭いた母の細い指

あの時の母は今の私

「実家はいいな。なんたって親飯（おやめし）  
は最高」

娘が孫娘を連れてやって来た

「いつでもいらつしやい。ここはあなたの家

だから」

母と娘の幸せの時間

## 青い金魚

母の日、参観日

ゆうチャンが絵を描かきました

青い金魚に餌をあげる母さんの手が

青い

テーブルのお皿も

コップも

真青です

そして

ゆうチャンは

わたしにポツンと言いました

「先生、ママね、病気のなの」

青いお皿を描かきながら

さみしそうに

うつむきながら

小さな声で言いました

そつと

抱き寄せると

「先生、ママみたい」

うれしそうに言いました

あの日わたしは

ゆうチャンに教えてもらいました

「母さんは、いつも元気でいてほしい」

……と。

いつ思い出しても

ゆうチャンの描いた

青い金魚は

悲しそうに

わたしの心に泳いでいます



## おばあちゃんの家の柿

おばあちゃんの家いえにある柿の木。

お母さんが大好きな柿の実。

少しやわらかくなつたくらい  
の柿の実は、甘くて、私も大好き。

家の縁えんに座つて、柿をむく。

おばあちゃんも、お母さんも

上手じょうずにナイフで柿をむく。

くるくる柿をまわすたびに

柿の皮が下へ下へ長くなつていく。

私もできるよになるかなあ。

おばあちゃんの家にある柿の木。

私も大好きな柿の実。

お母さんは私に

「いっぱい食べよ。」つてむいてくれる。

「お母さんも食べ。」つていうと、

「あんたがいっぱい食べてからな。」  
と言う。

おばあちゃんが、柿をむきながら

「ほれ、あんたも食べ。」

と言つて、むいた柿を皿にのせた。

「うん。」と言つて

お母さんは、柿をほおぼつた。

「おいしいなあ。」

「うん、おいしい。」

おばあちゃんの家にある柿の木。

おばあちゃんも大好きな柿の実。

縁に三人ならんで、柿をほおぼる。

おばあちゃんと、お母さんと、私。

三人つながつた、つるし柿がきみたい。

# わたしも ネコになりたいよ

お母さんの 話し相手は  
うちのネコ

今日は一日 何しとつたかね  
もう お腹がすいたの

お母さんの 話し相手は  
うちのネコ

あんた 毛皮きて暑いねえ  
外に遊びに出て 疲れたか

お母さんの 話し相手は  
うちのネコ

うちのネコ  
きつとわたしより

お母さんを 知っている  
ネコにしか話さないこと  
たくさんあるんだろうな

うちのネコ  
わたしはいつも 嫉妬中

わたしも ネコになりたいよ  
お母さんの 話がたくさん聞ける  
うちのネコに

だけど わたしは  
わたしなの

お母さんの 話し相手は  
うちのネコ

と わたしになるといいな

## つかれたあ

きのうまで おじいちゃんの家に行った。  
お母さんは、おじいちゃんに野さいをたくさ  
んりょうりした。

わたしもがんばった。  
おぼんのだんごをぜんぶで百五十七こ  
つくってあげた。

今日のお昼は おべん当のおすし。  
おとうさんのは れいぞうこにしまつて、  
二人でたべた。

お母さんは、  
「つかれたなあ。」  
と言って、ぐうんと高くのびた。  
なぎなたぼこみたいで おもしろいから  
わたしも

「つかれたあ。」  
と言って、なぎなたぼこになってみた。  
ほこほこほこ とのびをした。

お母さんが、ミルクテイーをいれてくれた。  
いつもはこうちやをのませてくれない。  
今日は とくべつ。  
つめたくつてあまいミルクの中に  
すこしだけ こうちやのあじがした。

つかれたあ。  
でも、おじいちゃん にこにこしてたつけ。  
また、お手つだいしてあげたいね。  
いつしよに……。

にわか雨のあとなのに あつい。  
なんか わたしも お母さんも 時間も  
やすんでるみたい。  
ふしぎな日だなあ。

# みかん

みかんの皮をむいたら  
みいつけた

小さなふくろが  
大きなふくろに  
ピタッとくっついている

だっこされているのかな  
おんぶされているのかな  
はずかしかつて かくれているのかな

それは それは  
気持ちよさそうに  
心地よさそうに

わたしも こうしていたのかな  
こうして

ママのせ中で ねむっていたのかな  
こうして

ママのうでに 包まれていたのかな  
こうして

ママのひざで 笑っていたのかな

なかよしみかんを食べてみたら  
あまくて ほんわか やさしい味がした

## 頑張ったお母さん

三月十一日 震災の時

ぼくとお母さんは家に居た。

強い地震の中

「大丈夫だよ、絶対」

とお母さんが言った。

その言葉で少し落ちついた。

お姉ちゃんを学校にむかえに行つた。

またお母さんは

「大丈夫だよ、絶対」

と言つた

まるでま法の言葉だつた

笑顔で話すお母さん

ぼくとお姉ちゃんは不思議と安心できた

停電で暗い中

お母さんは笑つていた

いつも

「大丈夫強いんだから」

と言つていた。

ま法の言葉を連発した。

震災から一ヶ月後

お父さんが東京から帰つて来た

お母さんは泣いた

お父さんの顔を見て

涙を流した

頑張った涙

お母さんが

頑張るま法から解放された涙

ま法つかいのお母さんは

この時から

震災前のお母さんに戻つた

今度何かがあつた時

今度は

ぼくがお母さんを守る

ま法つかいにならなくても

強くなつて

ぼくはぼくのまま

お母さん

そして家族を守る

# ふくろう

ぼくの家のやねうらに  
ふくろうのあかちゃんが  
いる。  
今年で二年目。

きよ年、  
二わのかわいい赤ちゃんが  
生まれていたのを見た。  
目をぱちぱちさせて、  
まっ白い毛がふわふわ。

「ピチュー、ピチュー。」  
かわいい声でなっている。  
お母さんをよんでいるのかな。  
夜になると、  
お母さんのふくろうが、  
くらやみから

さあつととんでくる。

「ギャー。」

つよそうな鳴き声。

赤ちゃんがよんだから

いそいできたんだ。

赤ちゃんを守りに来たのかな。

赤ちゃんに食べ物を運んできたのかな。

今年はまだ

赤ちゃんのすがたを見ていない。

白い、ふわふわ毛のあかちゃん、

目がくりくりの赤ちゃん、

早くみたいな。

赤ちゃんがうまれてうれしいよ。

わたしの いえに 赤ちゃんがうまれました。

赤ちゃんは とても、とても かわいいです。

わたしは 赤ちゃんを だき上げたり、するするしたりします。

赤ちゃんは ほっぺが ぷにぷにすぎて かわいすぎるのがかわいいです。

赤ちゃんのなきごえはかわいいです。

うねー、うねー、となぎますが、うふふふとも なぎます。

うまれたばかりなのに二キロもありました。

でも ほっぺにメロメロになってしまいました。

かぞくぜんいん赤ちゃんがすきです。

うまれてから四日です。

うまれたばかりなのでかわいいです。

## 母さん牛と子牛

牧場で子牛のほにゆう体験をした。

子牛が飲むのは、こなミルク。

お乳は、人間が取ってしまう。

それを知って、ちよつとかなしくなった。

子牛だって、本当は母さん牛のお乳を飲みたいのかもしれない。

母さん牛だって、子牛にお乳をあげたいのかもしれない。

人間にとって、牛乳はともえいようのあるものだけど、子牛にとっても、必要なものなんじゃないかな？



## スズムシくんへ

スズムシくん。

一人でさびしいでしょ。ごめんなさい。

でも、生まれてきてくれてよかった。

ほんとうはね、ぜんぶだめだと思って、

土をすてようとしたの。

そうしたら、生まれていてびっくりしたよ。

よく生まれてきたね。

はじめはあんまりエサをたべなかったね。

おいしくなかった？

いまね、エサに、「きゅうりはどうしよう。」

とまよっているの。

きゅうりはすぐにくきつてしまうからね。

やっぱり、スズムシくんの一ばんすきなも

のは、ナスかもね。

ケースの中に、ダンゴムシが入っていたと

きは、びっくりしたでしょ。

それから、くものすがはつてあったときも

こわかったでしょ。

これからも、おせわをしてあげるね。

もつともつとげん気になってね。

スズムシくんのおかあさん

夏奈子より

## おかあさん大好き

おかあさん、

お仕事がいそがしいのわかってるから

わがママがまんしてるけど、

本当は、もつといっしょにあそびたいなあ

おかあさん、

おかあさんがおばあちゃんになるなんて、

想像できないけれど、

つかれてためいきついているのを見ると

きゆうに心ぱいになっちゃうよ

おかあさん、

大しん災で電気がつかなかった時も

おかあさんがいる所だけは

明るく電気がついていてみるみたいに見えたよ

おかあさん、

さんかん日に、おかあさんが来てくれると

なんだかがんばれそうな気がしてくるよ

おかあさん、

おかあさん、

おかあさん、

優しい返事を聞きたくて

何度でもよびたくなるよ

おかあさん

## かあさん

かあさんは コーヒーが大すき  
かあさんは

いつもコーヒーをのんでるよ  
おいしそうにのんでるよ

学校でしんぶんを見たよ

そしたら

コーヒーマーカーの

しゃしんを見つけたよ

「かあさんにコーヒーマーカー

かってあげよう」

くろとぎんの

ピカピカのエスプレッソマシンだよ

ぼくがおとなになったら

コーヒーマーカーをかってあげるよ

ぼくがはたらいて

おきゅうりようをもらったら

一ばんに買ってあげるよ

かあさん

「おいしい」

つてのんでくれるかな

いっしょにのもうね

ぼくが コーヒーをいれてあげるね

しんぶんをきりぬいて

今もだいじにもってるよ

かあさんがよろこぶのが

たのしみだよ

## 母のおにぎり

うちの母のおにぎりは  
すごくデカイ  
コンビニおにぎりの  
二倍はある

### 野球の練習後

おにぎりを五個食べる  
あまりにデカイから  
腹がパンパンだ

まわりのお母さんは  
デカくて笑うけど  
監督は褒めてくれる

一年間そのおにぎりを食べたなら

身長が十二センチ伸びた

おにぎり効果かな

これからも

デカイおにぎりよろしくね

## さるのお母さん

動物園に行ったら、

さるのお母さんが赤ちゃんをそだてていた。  
大事そうにだっこしておっぱいをのませて  
いたよ。

赤ちゃんはとてもかわいい顔で

むちゅうでのんでいたよ。

お母さんはときどき赤ちゃんの頭をなでな  
がらしあわせそうな顔で

まるでわたしに見せてくれるかのように

近くまで来てくれたんだよ。

わたしもとっても

しあわせな気もちになったよ。

とっても心があったかくなったよ。

おさるさんありがとう。

また今ど会いに行くよ。

大きくなったら赤ちゃんを見せてね。

おかあさん、ありがとう

さきとわたしはふたご

おかあさんは、

まい朝、かみをむすんでくれる

この前の金曜日は、

前が三つあみでうしろがポニーテール

おしやれにむすんでくれた

さきには、べつのむすびかた

どんなにいそがしくても

二人べつべつにむすんでくれる

ありがとう、おかあさん

「ぶじでよかったね」

五時間目が終つて  
帰りの会が終つた時  
カタカタカタ ドーンと地しんがおきた

わたしはつくえの下にかくれた  
目をつぶつてじつとしていた  
目をつぶつていると  
どんだん心ばいになってきて  
お母さんがとても心ばいになつた  
お母さんは大じょうぶかな  
お母さんはおつちよこちよいだから  
ちやんとつくえの下にかくれたかな  
と思つた

先生が「外に出てください。」と言つた  
外は雪がふつていた  
雪の中でまたお母さんを思い出した  
早く家に帰つて  
お母さんに会いたいな

お母さんが作つた  
あつたかいココアをのみたいな  
と思つた

地しんがおちついて  
四時半ごろ お家についた  
げんかんはたながたおれて  
ぐちやぐちやだつた

にもつをふまないようにしながら  
お母さんをさがした  
くずれた本だなのかげから  
お母さんの顔が見えた

おもしろい顔だつた  
きんちようがとけてわらつてしまつた  
お母さん、ぶじでよかつたね  
「ただいま。今帰つたよ。」

## お母さんになったたくじやく

ぼくの学校のくじやく。

ぼくたちが見にいくと、ちかづいてきてくれる。

さいきん、たまごをうんだ。

お母さんくじやくになった。

ぼくたちが見にいくと、あわててたまごの場しよにもどりおなかでかくすようにすわりこむようになった。

まもっているんだ。

赤ちゃんクジャクを。

お母さんになってなんだかつよくなったみたいだ。

たのしみだな。

赤ちゃんクジャクに会える日が。



## ズックあらい

ぼくは、ズックあらいが大きい  
だつて

おかあさんがおしえてくれたんだもの  
あわが シャボン玉みたいで

おもしろいよ

くさいにおいも

きたないよこれも とれて

いいにおいがするんだよ

きれいになると

おかあさんが、いつも

「きれいになってよかったね。」

と言ってくれるんだもん

## ママとおひるね

ママがおひるねしてるの  
みてたら、

わたしもねむくなってきた。

ママのきもちよさそうなかお  
みてたら、

わたしは、ママとぺったんこして  
おひるねしたくなってきた。

ママのそばに

そおつとねたら、

ママ、とつてもあつたかくて、

わたしすぐ

きもちよかつたよ。

ふわふわつて、

こころがおふろになったよ。

ずっとこうしていたいな。

ママといっしょにいたいな。

## わたしはちびおかあさん

おかあさんあかちゃんまだ？

おかあさんがあかちゃんうんだら、かわりに  
おかあさんしてあげるよ。

おむつかえてあげる。

えーんえーんてないたら、だっこしてあげる。  
えほんもよんであげるよ。

ポロンポロンてピアノきかせてあげるよ。  
ララランてうたもうたつてあげるよ。

ねむたくなったら、とんとんしてねかせてあ  
げるよ。

だいききなわんちゃんぬいぐるみも、ちよ  
つとだけかしてあげるよ。

おなかすいたらミルクもあげれるよ。  
わたしがいっぱいおかあさんしてあげる。

でも、おっぱいだけはおかあさんがのませて  
あげてね。

はやくおねえちゃんになりたいな。

## お母さん

ぼくのお母さんは、かわいい  
目が丸くてくるりんとしてかわいい  
お母さんのつくるハンバーグ、れいめん  
「おいしい。」

ぼくが言くと、お母さんの目が  
ますますくるりんとしてかわいい

「おふろそうじしていい。」  
「いいよ。」

お母さんの目が、えがおでくるりん  
やきゅうも、サッカーもいつしよにしてくれ  
る

「うまいね、お母さん。」

お母さんの目は、とくいそうにくるりん  
ぼくは、お母さんのかわいい目が好き  
だから、お母さん、

お兄ちゃんとけんかしたとき

「りゅうぎ、やめろう。」

つて、とらの目になるのは、やめてね。

## いっしょに迷子

いっちゃんが、まいごのときはね、  
ままも、まいごなんだよ。

だから、みつかつて、よかった。

小さい私にも聞き取りやすいように  
言葉と言葉の間を空けて話すその声は  
春のお日さまみたいにあたたかくて  
なきじゃくる私を笑顔にしてくれた

夕焼けがピンク色だった帰り道

怖くて 怖かった迷子が

水族館くらい楽しい思い出になっていた

ままも、そんなかんじがする。

きょうは、いい日だったね。

自分が嬉しいときは相手も嬉しくて

自分が悲しいときは相手も悲しい

迷子の日

お母さんが教えてくれたこと

きちんと覚えてるよ

いっちゃんが、まいごのときはね、  
ままも、まいごなんだよ——

## 夏が来た

今日お母さんが梅を見ていた。まだ青い梅  
お母さんはいつも夏に梅干しをつくる。  
すっぱくておいしい梅干しを。

梅は二、三日で黄色くなる  
そうすると家の中は梅の香りですっぱいだ  
まるで果樹園にいるよう

甘い甘い香り  
つけ始めた梅は形や色、香りまでも変える  
いよいよ赤い洋服を着せる時が来た  
赤じそは私が葉をとった

みるみるうちに赤い布はざる一杯になる  
どんどん赤くなつていく梅をお母さんは嬉し  
そうに見ている

私もまねをする  
お父さんや弟も見ているけれど一番嬉しそう  
なのはお母さん

一番笑顔のお母さん  
お母さんが笑っていると私も嬉しい  
とつても嬉しい

ある日おきるとすっぱいにおいがした

梅干しのおい

ついに干したのだ

ベランダに置いてある梅干しはかわいい

毎年我が家が見る夏の光景。赤いじゅうたん

見るたび見るたび赤くなる梅干し

食べる日が楽しみだ

そして出来上がった

朝ご飯に真つ白なご飯に梅干しをのせる

真つ赤なきれいな梅干しを

「おいしい」

その梅干しは買うのと味がちがう

手作りの味がした

買うよりもとてもおいしくて

お母さんの手作りの梅干しが大好きだ

おいしい梅干しをつくってくれるお母さん

私のお母さん

大好きな梅干しみたいなきれいなお母さん

私のじまんのお母さん

# ママ、うれしいでしょ

ママのおなかにあかちゃんがいるんだって

うれしすぎてわくわくしすぎて

にこにこしちゃった

ママ、すごくうれしそう

ママにかわってちいさいままにへんしん

ママがおなかいたいとき

おにぎりづくりにちょうせん

ちいさくてもなんだってできるんだから

ママ、みゆうのおにぎりうれしいでしょ

おなかがおおきくなって

くつしたがはけないままに

わたしがはかせてあげたんだよ

いつものさかさま

ママがよろこんでくれるから

なんでもしてあげたくなっちゃう

できることいっぱいうれしいでしょ

みゆうは、ママのおひさまみたいな

やさしいところがだいすきだから

ママをうれしいこといっぱいにしてあげるね

## ぼくらはおたすけマン

ぼくのいえは三人きょうだい  
ときどきみんな

おかあさんおたすけマンになる。

ぼくは、米をといだり

やさいを切つていたため、

あじつけもする。

おかあさんといっしょにね。

はるとは、おとうとのせわ。

あと、一年生だけど、

ぼくとおなじこともできるよ。

やまとは二さいだけど、

ハンカチたたみならできる。

ぼくらは三人で

せんたくものほしとせんたくたたみを  
こつそりやつたんだ。

おかあさん、びつくりするんだろうな。

おかあさんが、しごとから帰ってきて  
ドアをあけた。

せんたくものを見て、「わっ。」と、びつくり。  
やさしいかおで

「ありがとう。」

つて言った。

おかあさんがよろこぶと

ぼくもうれしい。はるともうれしい。

だから、ぼくは

「おかあさんおたすけマン」になるんだ。



## 元氣のもと

「ぼくの元氣のもととは

お母さんのつくつてくれる

りようりだよ

お母さんの元氣のもとは何。」

ぼくがお母さんに言ったら

お母さんは

「それはね

文世のえがおだよ。」

とつてもとつてもうれしくなつて

お母さんにむかつて

にここに にここに

そうしたら

お母さんがおなかをさわりながら

「おなかいいかい

元氣になつたよ

ありがとう。」

お母さんも

にここに にここに

ぼくもおなかいいかい

ますます元氣になつたよ

## たこやき

お母さんは、ときどき  
たこやきを買ってきてくれる

ぼくと弟のかいりとかぐや

それからお母さん

ぜんぶで四人

八このたこやきをわける

「二人二個ね！」

ぼくは、すぐさま計算してみんなにわけた

気づくと皿は空

大好きなたこやきは

あつという間になくなる

「おなかいっぱいだから いいよ。」  
お母さんがそつとたこやきをくれた

お母さんがおなかいっぱいじゃないこと

ぼくは 知っていた

知ってたんだけど

本当に知っていたんだよ

だけどたこやきは ぼくの口に

あつちや やつちやつた

お母さんが大好きな いちこのときは

ぼくが一つ

ぼくが一つ・・・

でも いちごも好きなんだよね

# おかあさんとさんぽ

いえの近くのでいぼうをさんぽした

おとうととおかあさんと いっしょだった

おとうとが はしつたら

おかあさんは わらつた

おとうとは ころびそうだった

風がすうつとふいた

おかあさんは にこつとした

気もちよきそうだった

またいっしょにさんぽしようね

おとうとといっしょにね

ぼくが 石ころさがしをしたら

おかあさんも きよろきよろした

ぼくは 石あつめがすき

## わたしのおかあさん

わたしのおかあさんは、

そうじが大すきです。

とくに、げんかんとトイレは

いつしようけんめいそうじをします。

おかあさんは、

「げんかんには、くつは一人一つしかだしちやだめ。」

と、言います。

わたしが

「どうして？」

と、聞くと、

「うん気が下がるから。」

と、言います。

わたしがローラースケートをげんかんにだしていたら、

「これもしまつてきなさい。うん気がからまわりするでしょ。」

と、言っておこります。

わたしが、

「うん気が下がるってなに？」

と、聞くと

「いいことがおこらないってこと。」

と、おしえてくれました。

げんかんをぴかぴかにすると、

外からいいことがはいつてくるそうです。

「トイレはなんでまい日そうじするの？」

と、聞くと

「うたにもあるでしょ。トイレにはかみさまがいるからだよ。べっぴんさんになれるんだって。おかあさん、びじんになりたいもん。」

と、いつてわらつてました。

わたしもトイレそうじをしたらきれいになれるのかな。

なつやすみ、わたしもトイレそうじをがんばってびじんになりたいです。

## 新しいお母さん

昔お父さんとお母さんはりこんした

僕はお父さんについて行った

おばあちゃんの家に行った

そこでずっと暮らしていた

ある日お父さんがこう言った

「新しいお母さんがくるよ」

僕はその言葉に目を向けなかった

どうせ前のお母さんみたいな人なんだ

と思った

お母さんがやって来た

けれど僕は話をしない

しばらくすると少しずつ話をしはじめた

僕はこのお母さんをごくふつうのお母さん

だと思っていた

それは、ちがっていた

その日は朝からお母さんと話をしていた

僕はふつうに聞いていた

そしたらお母さんがこう言った

「新しく来たお母さんでも、ここまで愛じよ

うそそぐ人なんかあまりいないんだよ。ふつ

うだったらね、私が生んだ子供じゃないから

かわいがないんだよ。どうだっていいんだ

よ」と言った

僕はそこで初めてお母さんの強い気持ちが

わかった。

「生んだつもりで、育ててあげる」

そう言った。

僕は心の中がうれしくてうれしくてたまら

なかった。

# 生きててよかった

三月十一日

しんじられない大じしん

夕方家族はそろったけどお母さんは、かま石だ。

お母さんはつ波で流されてしまったのだからか。

次の日、みんなでかま石へ

口内の交差点でけいかに止められてしまった。

その次の日、お父さんが回り道をしてかま石へ

お母さんのしよく場へ行くと、ちょうどお母さんが出てきた。

すごいいきおいでだきついた。

お母さんも泣いていた。

お母さんにあえた三分間

お母さん生きててよかった。

つ波にながされなくてよかった。

神様、おばあちゃんありがとう。

これからもみまもっていてください。

# おかあさん だいすき

おかあさんが

ごはんつくっているところ

すぎだよ

ごはんつくっている

うしろすがたがすぎだよ

せなかで

わたしをみて

わらってるみたい

「もう、しゅくだいおわったの。」

「おんどく、じょうずだよ。」

「さやこ、かわいいよ。」

とって

わらってるみたい

だから

ごはんつくっているうしろすがたが

だいすきだよ

# おねがい、かあちゃん

かあちゃん、  
かわいいから  
いえがこわれるくらい  
おこないで。  
ぼくはつしないで。  
さげばないで。

かあちゃん、  
おれ、  
いいこになれるように  
がんばるからさ。  
そしたら、  
ストレスたまらないでしょ。

おれととうちゃん  
もうすこし  
おとなになれるように  
するからさ。

もう、  
おっぱいを  
もみもみしないからさ。

だから  
おねがい  
かあちゃん、  
かわいいまんまでいて。



## おかあさんへ

おかあさんリハビリがんばってね

イスにすわってボールをうごかしたり

つえなしで歩いたり

ねころんで足を上げたり

むりしないで、やってね

わたしは足をもつてあげるよ

手をつないで歩いてあげるよ

おかあさん

早くよくなるといいな

おふろをあらってあげるよ

ちやわんもかたづけしてあげるよ

せんたくものを下ろしたりするよ

おかあさん

早くよくなつてね

おかあさんがいないと

とつてもさみしいよ

だけど

がまんしているよ

土日には

おかあさんにあいにいくからね

## 「お母さん」

「お母さん、大じよぶ？いたくない？」つて何回聞いたかな。

ギユツを何回がまんしたかな。

お母さんが二週間いなかっただきよ年の夏休み。

どこにも行けなかつた夏休み。

びよういんの白いベットに、ずっとねていたお母さん。

お母さんがいたいはずなのに、わたしが泣いてしまったあの日。

おなかには大きな手じゅつのきずがのこつている。

あつい夏なのに心がとつてもさむかつた。

でも、今年はずつと一しよにいてくれる。ギユツもいっばいできる。

海に行こう。一しよにおりよう理しよう。

お手つだいっばいするね。

せかいでたった一人のお母さん。

## 小さなお母さん

お母さんが病気になった  
そんなに重くないけど、しばらく家事はで  
きそうにない

そんな時立ち上がったのは

お姉ちゃん

お姉ちゃんは「小さなお母さん」となって  
家事をこなしていく

当たり前のようだけど

本当は当たり前じゃない

すごいこと

お母さんに聞きながら料理をするお姉ちゃ  
ん

さらに僕の学校のお弁当も作ってくれた

そのお弁当は不思議な味がした

おいしいけど不思議な味

僕は「おいしかったよ」と弁当を返した

「ほんまに？」と疑いながらもうれしそう

なお姉ちゃん

僕はお姉ちゃんに感謝している

ありがとう

「小さなお母さん」